

正面校名碑と『銅像建立予定石』

県大正面に道路に面して『静岡県立大学』という、石刻の校名碑がある。碑というより、石の看板というところか。

これは、昭和62年4月2日に除幕されたものである。正式には1日の開学なのだが、式典は1日が日曜日であった（エイプリルフールでもあった）ため2日になったのだ。同じ日に発足したJRは、4月1日生れ同士なのである。

2日の『静岡県立大学開学式・第一期入学式』は、体育館にシートを敷いて行われた。まだ大講堂・図書館はなく、食品栄養学部棟、教養棟、管理棟、体育館に女子大の体育館・校舎が残ったままとっていた。

<360万個のレンガ>

開学式で、斉藤知事は、下記のことを言われた。
1、この大学は、県民の熱い期待でつくられている。赤レンガは、県民ひとりひとりが持ち寄ったという意味で360万個ある。

谷田風士記

2、この大学を日本一の大学にする。
3、石の校名碑（先述したもの）の横に大きな石があるが、これは将来県立大学から、ノーベル賞級の人物が出たとき、銅像を建てるためのものである。

すでに開校して15年になり、開学式典を知る人も少なくなりつつあるが、校名碑の東隣にある石は、いまもわれわれを励ましているのである。

（国際関係学部教授・高木 桂蔵）



校名碑と「銅像石」

71

フィリピン大学の短期交換留学生来学

本学と学術交流協定を結んでいるフィリピン大学から短期交換学生交流事業による派遣学生のチャックベリー・ジュリアン・パスカル君（Chuckberry Julian Pascual）が10月初旬に来学した。パスカル君は、フィリピン大学の4年生で、3月末までの6ヶ月間、清水市内のホストファミリー宅にホームステイしながら国際関係学部で日本語や日本文化についての授業を聴講している。

フィリピン大学との短期交換学生交流は平成9年度から始まり、毎年、本学の学生と一人ずつ学生

交流を行っている。



学内ニュース「はばたき」への掲載について

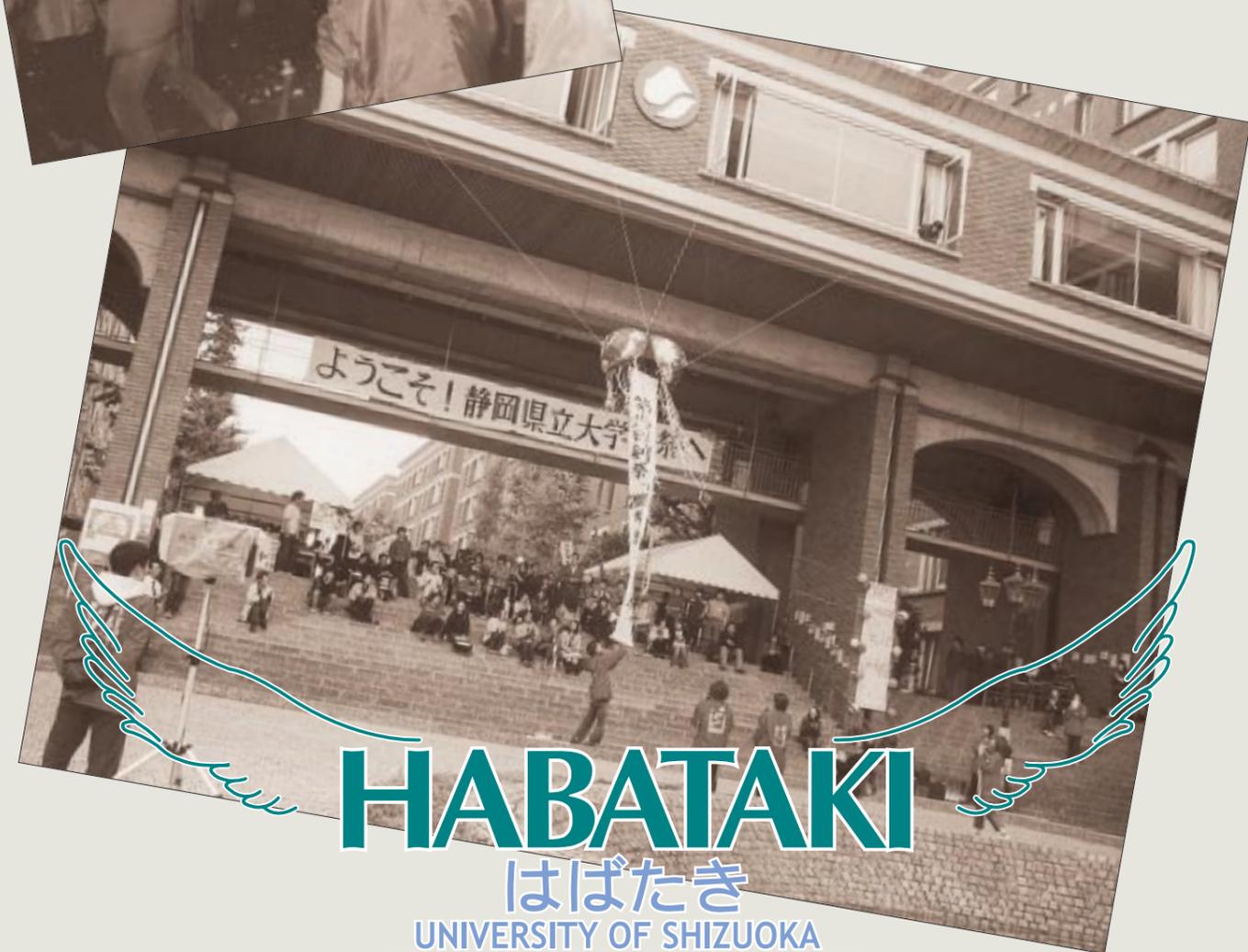
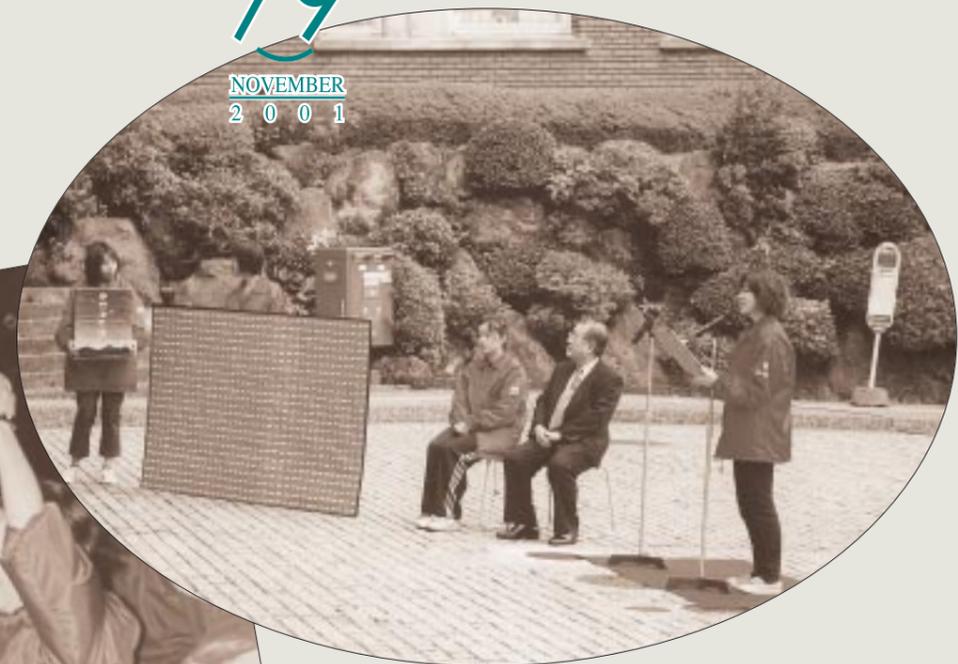
教職員・学生の新刊案内、各種の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の開催などの教職員、学生関係のニュースや投稿を歓迎します。

掲載希望がありましたら、事務局経営課・企画スタッフ（管理棟2階）あてに原稿をお寄せください。

E mail: kijo4@gm.u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集 静岡県立大学広報委員会 TEL 054-264-5103

静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>



HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi shizuokaken 422-8526 Japan

inside NEWS



第15回剣祭開催

静岡県立大学の大学祭である「第15回剣祭」が11月3日（土）から5日（月）までの3日間開催された。今年の剣祭のテーマは「2001年夢中の旅」。

11月3日のオープニングセレモニーでは、廣部学長の挨拶に続き、体調を崩し剣祭に参加できなくなった剣祭実行委員会委員長の唐澤君に代わり小野寺副委員長が開催の挨拶を行い、くす玉が割られ開会が宣言された。

剣祭の期間中、11月3日は雨に降られたが4日の日曜日は雨も上がり大勢の人出があった。

各学部棟では研究室公開や、文科系のクラブ・サークル等が活動状況を発表・展示し、ユニバーシティプラザでは多くの模擬店が出店、コミュニティプラザ、講堂、体育館でも各種のイベントが行われた。また、今年は本学の創立15周年という記念すべき年でもあり、学長自らが企画した「創造力啓発コンテスト」も開催された。



橋本悟郎先生名誉博士号授与式・記念講演会

本学は10月10日（水）、ブラジル在住のサンパウロ市博物研究会植物標本館館長で、本県が生んだ世界に誇る植物学者の橋本悟郎氏（1965年、ブラジルに帰化）に静岡県立大学名誉博士号を授与した。また、引続き行われた記念講演会において「ブラジルの薬用植物について」と題して講演し、同氏はブラジルに渡っての苦労や、現地での植物採集の様子をスライドにより紹介するとともに、ご自身の経験から学生に向けて「若い時期に志を持つことは人生の転換期においては非常に大事である。」とメッセージを述べられた。

なお、本学の名誉博士号の授与は、開学10周年記念時の李遠哲国立台湾大学教授に続き2人目となる。

<ブラジルの薬草について>

私は昭和9年（1934年）、21歳の時に移民として地球の反対側のブラジルに行きました。日本からブラジルへの移民は1908年（明治41年）に始まります。これにはブラジルの奴隷解放が1888年に制定され、農村の労働力がなくなったという事情がありました。

ブラジルへ渡った日本移民は第二次世界大戦までに20万人以上を数えましたが今日ではそれが逆になってブラジルからの日系子弟が25万人近く、日本に入っています。私がブラジル行きを決めた理由は当時としては自由に海外に渡航できるのはブラジルだけしかなく、それにブラジルは私の好きな植物の豊かな国であったからです。

私はブラジルに渡って、まず、農業学校に入り、2年間学んだ後、当時できた栗原自然科学研究所に入り、植物研究の第一歩を始めました。次いでサンパウロ植物園に研究のため通いましたが、間もなく大戦が起こり、ブラジルの敵国である日独伊の国籍の者は活動を制約され、研究を再開し、各地に植物採集に行くことができたのは戦後、1950年になってからのことでした。

一つの転機は1954年、ブラジル人の土地会社の農業試験場をまかされ、サンパウロの南に位置するパラナ州、グアイラという町に行き、20年間もの間、仕事の傍ら研究に努めたことです。というのはこの町はパラグアイとの国境にあり、使用人もパラグアイ人が多く、しかもその大半はゲラニー族というインディオの馴化した人達でした。その中に薬草を使って医療を行う者があり、暇を見



ては彼を伴って付近の薬草を調べて廻ることができたからです。

ブラジルは薬草の多い国と言われていますが、考えて見れば、最初にブラジルに来たポルトガル人もどの植物が薬草として使われるのか、またはそれは何に効くのかを原住民のインディオから聞き知ったのです。私もそれをやった訳です。

こうして私は植物標本を集め、ブラジル各地を歩き、70歳を過ぎてからはアマゾンや東北地方にも調査に行くようになりました。1996年には「ブラジル産薬用植物事典」としてブラジルの薬草をまとめて発表しました。その後は南米の各地に足を伸ばし、ペルー、ボリヴィア、エクアドル、ガラパゴス諸島、そして今年チリ、アルゼンチンの南端、パタゴニア地方へと植物研究の旅を続けています。

広い南米の各地を歩き、その自然に触れ、研究していくことに私の興味は尽きないのです。

橋本 悟郎

静岡県立大学創立15周年記念事業 2001学術フォーラム()を開催

10月19日(金)、本学創立15周年記念事業の一環として、学長特別研究費採択課題及び後藤研究費受領研究の研究成果を発表する2001学術フォーラム()が本学看護学部棟において開催され、研究助成を受けた研究者22名が発表を行った。後藤研究費による研究発表時には、研究費の寄付者である後藤磯吉はごもフーズ会長にも御参席いただき聴講いただいた。

学術フォーラムでは、本学で行われている研究



の目的や成果を学内外に公開することにより、本学の研究活動を社会に示すとともに部局間の相互理解を図ることができるものと期待されており、今回初めての試みとして開催されたが、今後も定例化し実施される予定である。

なお、本年度末には学術フォーラム()として、平成13年度の学長特別研究・後藤研究(一般研究分)及び平成11年度に学長特別研究課題として開始し、後藤研究費によって継続された茶先端生命科学研究所の研究成果報告を行う予定となっている。

静岡県立大学創立15周年記念事業 第5回日中健康科学シンポジウムを開催 12/5・6

1993年に本学で第1回日中健康科学シンポジウムが開催され、その後、隔年毎に日本および中国でシンポジウムが開催されてきた。1997年には、本学と浙江省医学科学院との間に大学間科学技術協定

が締結され、名称も日中健康科学シンポジウムと改められた。

日本・中国間のグローバルな学術研究の発展と日中共同研究の推進を図るとともに、本シンポジウムには、本学大学院生も多数参加する予定になっており、本学の学部・大学院教育の更なる発展にも資するものと期待される。また、県内国公立研究所、病院、企業からの口頭発表(全て英語)

も盛り込むなど、県内研究機関とのより一層の連携と県内産業の更なる活性化を目指している。

(概要)

開催日時 平成13年12月5日(水)、6日(木)

会場 静岡県立大学

参加者 研究者および一般県民

浙江省医学科学院からの招聘者

毛江森名誉院長、張幸院長等

10名(男6名、女4名)

発表内容

「創薬」、「生命科学」、「機能性食品」、「環境」の4分野をテーマに日中の研究者が発表を行う他、大学、国公立研究所および民間企業から募集した演題をポスターとして発表する。

大学院ビジネス講座が開講

静岡県立大学大学院ビジネス講座が10月15日(月)、沼津市の県立大学沼津エクステンションセンター(ぬまづ産業振興プラザ内)においてスタートした。

ビジネス講座は、高度で専門的な実務的知識・技術を持つ人材の養成のため、社会人を対象とした大学院レベルのハイレベルな公開講座で、下表のとおり5つの講座でそれぞれ20名程度の受講生を対象として2月までの間に各10回開かれる。

講師には本学経営情報学研究科教員を中心に民間の第一線で働く実務者も加わり、地元産業界な

どからは将来の地域産業を支える人材の養成が期待されている。



曜日・時間	科目・講師
月曜 18:45~	「行政政策論」~市民と自治体のパートナーシップによる行政革命 講師 北大路信郷 静岡県立大学教授
火曜 18:45~	「コーポレート・ファイナンス(スルガ銀行寄附講座)」 講師 川北博 元日本公認会計士協会会長 ほか
水曜 18:45~	「企業税務」~中小企業と税務管理 講師 青山英男 青山会計事務所代表 ほか
金曜 18:45~	「ITアプリケーション」~SOHO環境構築のためのIT技術総論 講師 鈴木直義 静岡県立大学教授 ほか
土曜 10:00~	「マーケティング論」~売れない時代に売るための条件づくり 講師 服部守久 博報堂 i-メディア局 i-メディアプロデューサー

国公立連携講義「生命の科学」が短期大学部で開講

本学、静岡大学、浜松医科大学および国立遺伝学研究所の県内国公立4機関のそれぞれの特色と人的資源を生かした新たな授業形態としての連携講義が本学短期大学部において10月4日(木)スタートした。

連携講義は、各機関の教授陣により「生命の科学 バイオテクノロジーは人間と社会をどう変えるか」をテーマとしてオムニバス形式で開かれる。

また、連携講義は来年1月までに14回開催される

予定で、受講者は一般市民9名を含めた104名となっている。



「はばたき寄金」からのお知らせ

石井剛志君に「はばたき賞」が贈られる

11月3日、生活健康科学研究科博士前期課程2年の石井剛志君に学長から「はばたき賞」が贈られた。

石井剛志君は、今年8月アメリカサンフランシスコで開催された第5回健康とライフサイエンスにおける質量分析国際シンポジウムでポスター発表した「酸化修飾蛋白質に関するプロテオミクス」により大学院生の優秀な発表に対して贈られる学生賞を受賞した。(本件詳細は、前号で紹介済み)



学長企画イベント「創造力啓発コンテスト」の入賞者決まる

静岡県立大学創立15周年記念事業の一環として実施された学長企画イベント「創造力 啓発コンテスト」の入賞者が次のとおり決定し、表彰式が11月3日の剣祭初日に看護学棟で開催されました。

初めての試みであるコンテストに対して、6人の学生から7件の提案がありましたが、残念ながら学長特別賞に該当する提案はありませんでした。

賞区分	受賞者	提案タイトル
学長特別賞	該当なし	
奨励賞	該当なし	
特別アイデア賞	長谷川明良 (国際関係学部4年)	学内におけるリサイクルネットワークの構築
特別アイデア賞	斎藤翔太 (国際関係学部2年)	21世紀やかん「トッキー」
アイデア賞	船津和太郎 (国際関係学部4年)	第2世代のコンビニ

表彰式の席上、学長から来年度もコンテストを実施する予定であると表明がありました。是非来年のコンテストに向けアイデアを練ってください。

第5回学生文芸コンクールの入賞作品決まる

今年度の文芸コンクールには、文芸部門に26人から28作品(小説4・紀行文3・詩11・短歌1・俳句9)、「学生から産業界への提言 - 静岡経済同友会の提言を読んで」を指定課題とした評論部門には、2作品の応募がありました。学内教員により審査が行われ、次のとおり入賞作品が決まりました。

表彰式は、前記の「はばたき賞」、「創造力啓発コンテスト」と同じく11月3日に行われ、学長から賞状と副賞が贈られた。

【文芸の部】

賞区分	作品区分	題名	氏名	所属
優秀賞	小説	ア－シアン	山崎 奈津子	国際関係学部1年
	紀行文	アンティグア滞在記	青島 久美子	国際関係学部3年
	詩	夏の果	小林 桃子	国際関係学部3年
	俳句	思故郷(漢俳)	盧 少波	生活健康科学研究科M2
佳作	小説	恋	森下 美希	経営情報学部1年
	紀行文	Turky & Greece	石原 励子	国際関係学部3年
	俳句	この夏	志村 亜矢子	国際関係学部4年
	俳句	秋思(漢俳)	劉 芳	生活健康科学研究科D2
努力賞	俳句	秋日より	孫 麗竹	環境科学研究所研究生

【評論の部】

賞区分	課題名	氏名	所属
最優秀賞	学生から産業界への提言 - 静岡経済	酒井 美穂	国際関係学部3年
優秀賞	同友会の提言を読んで	藤巻 令子	国際関係学部2年

* 優秀賞以上の作品は、次号「はばたき80号」で紹介する予定です。

第4回学生スピーチコンテストの開催

今年度のスピーチコンテストが、11月3日に開催された。今回は、英語の部(日本人学生)に4人、日本語の部に3人の参加があり、入賞者は次のとおり。

昨年に比べ、参加者が少なかったことが残念ですが、来年のコンテストには大勢の参加を期待しています。

【英語の部】

賞区分	指定テーマ	氏名	所属
最優秀賞	My Dream	タルノフスカヤ 晶子	国際関係学部3年
優秀賞		近藤 隆子	国際関係学部4年

【日本語の部】

賞区分	指定テーマ	氏名	所属
最優秀賞	私の夢	アイリーン・ディー・レスパティ	経営情報学部2年
優秀賞		劉 芳	大学院生活健康科学研究科D2
優秀賞		孫 麗竹	環境科学研究所研究生



国際関係学部の動き

国際関係学部長 関森 勝夫

本学部の学生数は819名（13年9月26日現在）。内訳は国際関係学科284名（男子118名、女子166名）、国際言語文化学科535名（男子126名、女子409名）である。

13年度卒業生251名のうち、就職を希望した者で決定した者は132名（男子27名、女子105名）97.8%であった。

4月からの動向を以下報告する。

（1） 海外語学研修について

昨年度に引き続き、イギリス、ニューキャッスル大学での夏期語学研修参加者23名の「海外研修英語」の単位認定を行った。

今年度より友好提携校である浙江大学西溪校での春休みを利用しての語学研修参加者にも「海外研修中国」の単位を認定することとなり、5名が初めて認定された。

6月19日には、カリフォルニア大学バークレイ校サマーセッションズ・オフィスとの部局間協定を締結した。

来年度にはここでの語学研修にも単位認定が出来るよう準備を整えているところである。実現すれば、英・米語の語学研修地が揃い、学生の選択の幅が広がるので、研修参加の意欲と、その成果とが期待出来る。

フランスの大学とも協定締結に向けて準備がすすめられている。

（2） 昨年に引きつづき留学生に対する英語補習授業が行われた。加えて今年度は作文能力向上のために日本語の補習も開講され、留学生から大変好評であった。

（3） 今年度より予算配分方式が変わったことにより、本学部予算委員会を中心に、配分方法等を検討、従来の研究の質の維持を保证す

る研究費配分と合わせて積極的プロポーザル方式を導入することとなった。

特別研究予算は「学部活性化のためのプロジェクト」と名付け重要な柱を立てこれに重点配分を行った。主要な柱を2つ挙げておく。

英語教育の充実 就職時TOEIC650点程度の実力が要求される動向を見据え、TOEIC合格をめざした特別補講を行う。

IT教育の充実 就職を視野に入れて、ITに強い学生を育てることを目標としている。基礎講座、検定合格のための講座、留学生を対象とした講座に分けて行う。

、 の講座とも外部講師を任用して放課後開講される。！は155名の希望者があり、試験によって98名を選んだ。他学部の学生も受講したいとの希望が寄せられ、関心の強い講座であることが証明された。

（4） 国立大学の独立法人化の動向をにらみ、学部将来構想委員会を立ち上げ、学部改革のための将来構想をまとめるよう諮問した。公立大として初めて創始された本学部であり、これ迄に高評価を得て来たところであるが、15年経過したことで正しく検証し、改めるべき所は思い切って改め、積極的に改善策や新しい編成を創出することで、更なる発展をめざすべき時機だと考えている。これ迄に囚われない大胆かつ新鮮な学部像が答申されるのではないかと期待しているところである。

（5） 現在、同窓会設立のため、基礎となる名簿作りに取り組んでいる。卒業生の現況が把握されていなかったため、実家に葉書を送り協力していただいている。名簿が完成したところで同窓会開催を呼びかけたい。

この費用については学部後援会のご理解とご協力が得られたことは有難かった。

経営情報学部の動き

経営情報学部長 小林みどり

経営情報学部は、今年度、中国からの留学生を含む105名の新生を迎えました。教員は、この1年間に、財政学、マーケティング論、経営心理学の3名の新教員を迎えました。

教員数は27名で、県大の中では一番教員数の少ない学部ですが、経営学、行財政、会計学、数理、情報、自然システムと、幅広い分野をカバーする研究を行っています。

本学部の教育活動面の新しい動きとしては、今年度から学部棟に無線LANを設置したことがあげられます。学部内のどの教室からもコンピュータ



を学内外のネットワークに接続することができるようになり、授業や学生の自主活動に利用しています。

また、高・大連携事業として、今年度は、静岡東高校の生徒の聴講を受け入れており、10名弱の高校生が、「情報社会と経営」という1学年の科目を熱心に聴講しています。

8月のオープンキャンパスでは、高校生対象に模擬授業を実施しました。内容は、「日本企業システムの特徴」「役所の経営学」「仮想美術館システムの開発紹介」などで、高校生からは、「大学の教員や学生に身近に接して、絶対受かりたい気持ちが強くなった」など好評を得ました。

今年度10月には、沼津に夜間の大学院ビジネス講座を新設し、多数の社会人が行政政策論、コーポレート・ファイナンス、企業税務、マーケティング論、ITアプリケーションなどの講座を受講しています。

今年度も学生のグループがいろいろな場で自主的に活動を行っています。静岡市紺屋町に新設されたS O H Oオフィスに、学生によるベンチャー企業を立ち上げ、経営と情報の知識を実際の場に応用する実験を始めました。

また、7月には、県立美術館と共同で、コンピュータ内に仮想美術館を創りその運営を行いました。このほか、清水東高校定時制の情報リテラシー教育も学生が支援を行っています。

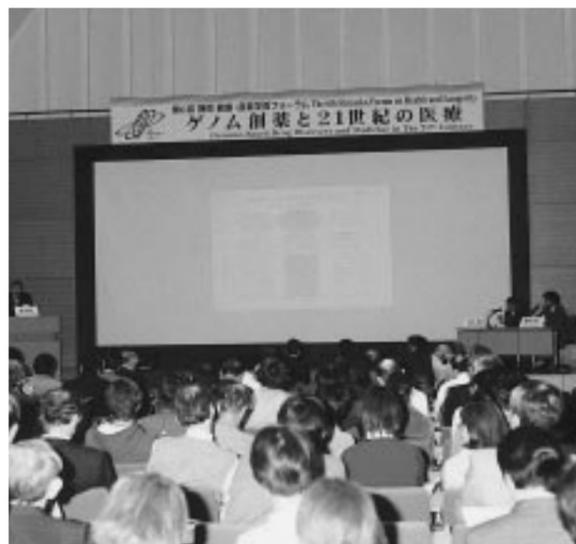
さらに、事務局と共同で、災害時の学生安否確認システムの実用化に向けて、最終段階の実験に取り組んでおります。

本学部は、創立から15年目に入り、卒業生も社会の中堅として各方面で活躍をしています。活躍の場は、企業、県庁・市役所等地方自治体のほか、自分で会社を始めたり、NPOを設立したりと、実に多彩であると言えます。社会で活躍するための土台を学生時代に作る事ができるようにと、教育に取り組んでおります。

以上、本学部の活動の一端をご紹介いたしました。



第6回 静岡 健康・長寿学術フォーラムを開催



静岡県では、静岡を舞台に、最新・最高の学術情報を世界に発信することにより、国内外の学術研究者等とのネットワークを形成するとともに、本県の学術の振興を図るため、平成8年度から、国内外から第一級の研究者等を招請し、「健康・長寿」をテーマとした「静岡健康・長寿学術フォーラム」及び「アジア・太平洋」をテーマとした「静岡アジア・太平洋学術フォーラム」を開催している。本学は、これらの開催について、毎回、中心的役割を果たしてきた。

本年度の「第6回静岡健康・長寿学術フォーラム」は、平成13年11月9日（金）と10日（土）の2日間、静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」において「ゲノム創薬と21世紀の医療」をメインテーマとして次のとおり開催された。県民を対象にしたシンポジウムの開催などにより、参加者は大学、研究機関、製薬企業等幅広い分野から延べ1,551名にのぼった。今回は、本学薬学部、食品栄養科学部、環境科学研究所、国立遺伝学研究所、静岡大学農学部、浜松医大からなる実行委員会を結成し、企画、準備してきた。フォーラムでは、ヒトおよび生物のゲノム、さらにポストゲノムに関する最新の研究成果が発表され、

ゲノムに基づく創薬とサイエンスへの期待、21世紀の医療情報が紹介された。

主催：静岡県、静岡健康・長寿学術フォーラム
組織委員会
組織委員長 星 猛（しずおか健康長寿財団理事長）
実行委員長 鈴木 康夫（本学薬学部長）

日程：＜学術会議＞

セッション

「ゲノムサイエンスの新展開」11月9日

セッション

「ゲノム研究から新世紀の医療へ」11月9日

セッション

「ゲノム創薬の戦略」11月10日

＜シンポジウム＞

ゲノムと21世紀の医療 11月10日

講師：海外講師2名（米国）

国内講師14名、

座長11名 計27名

＜主な講師＞

Sydney Brenner(米国：サルク研究所)、Goefrey S Ginsburg (米国：ミレニアムファーマ社)、榊 佳之(東京大学医科学研究所)、野口 照久(テノックス研究所)、清水 信義(慶應義塾大学)、新井賢一(東京大学医科学研究所)ほか



「静岡東高」特別聴講生が報告会を開催

本年4月から高校・大学間の連携の試みとして始まった静岡県立静岡東高等学校の生徒の特別聴講生としての受入れは、前期の23人が国際関係学部および経営情報学部で受講を終え、10月24日に静岡東高校において報告会が開催された。

報告会では、生徒のレポートをとりまとめた報告書により受講科目ごとに発表が行われ、引き続き本学の担当教員が受講生の講評を行い、熱心な受講態度などに高い評価を与えるとともに修了証書を授与した。

なお、現在は後期の受講生13人が国際関係学部において受講中である。



＜受講を終えての感想＞

村上 由希子 3年（日本とアジアA）

この受講での一番大きな収穫は、『勉強は楽しいものなんだ』と思えたことです。高校の授業は私にとっては平面的で、「勉強する」といえば大半は暗記です。しかし、その勉強は「役立つ基礎」であることを気づかせてくれたのもこの講義を受けさせていただいたからだと思います。嫌いな教科はやる気も起きないし、頭も働かないというのが現実ですが、「全て役に立つ」という意識をもつようになったのは、前の私から変化した部分だと思います。私は今回アジアの講義を受けさせていただきましたが、その中でこれからは「アジアの人間の一人である」という意識をもっと持たなくてはいけないと思いました。近頃だいたいアジアへの関心が高まってきましたが、自分を含めてまだまだヨーロッパ・アメリカに目が向いていると思います。もっと自分により身近な国々のことを知り、理解し合うことが大切だと思いました。今の観光地が表面的なパラダイスでしかないという言葉がとても心に残っています。もし受講しなかったら

今でも元々パラダイスだったんだろうと思っていたと思います。このように視野の広がる機会をとても満足しています。ありがとうございました。

渡邊 裕太 3年（ヨーロッパ史A）

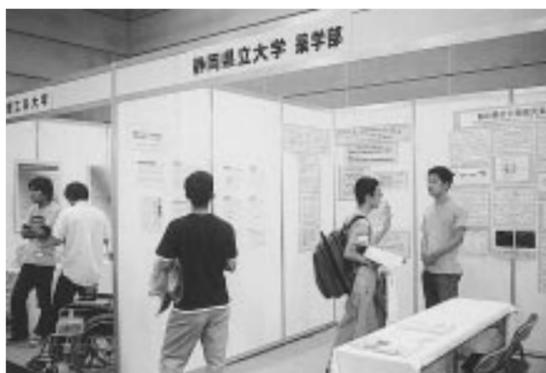
半年間、特別聴講生として県立大学に通って本当に素晴らしい経験を持つことができた。大学の雰囲気や味わえたことや、大学生から話を聞いたことなどは、自分のこの先の進路選択において、大きな材料となったし、やはり、大学での講義を直に体験できたことが何よりも印象に残っている。高校と大学の歴史という分野の違いや、大学の授業の専門的な授業に驚きを隠せなかった自分を今でも覚えている。講義に出て歴史という学問のおもしろさを再び知ったし、歴史の奥深さも味わえた。今では歴史のとりこである。

最後に、このような機会を与えていただいた県立大学の方々や高校の先生方には感謝したい。また、このような機会でも、先輩が新たな発見をしてくれることを願っている。

第2回しずおか産業・福祉・技術展に本学学生が出席

21世紀初頭の今日、とりわけ関心の高い分野の製品を一堂に集めた「第2回しずおか産業・福祉・技術展（静岡県等主催）が9月13日（木）～15日（土）にツインメッセ静岡で開催された。

本学からは薬学部の薬化学、医薬生命化学、薬品製造化学の各教室、食品栄養科学部の生化学、老化制御、食品衛生学、食品製造工学、代謝調節学、栄養化学の各研究室の学生による日頃の研究成果を出展し、県大のブースにおいて学生が来客者に説明を行った。



インターンシップで企業に学ぶ！

大学院生活健康科学研究科では修士1年生を対象に、初のインターンシップ制度を利用して県内企業での実地研修を行った。初めての試みであり、十分な広報ができなかったが、14社から賛同をいただいた。本年7月～8月に大学院生16名が4日～10日間の研修を受けた。参加した企業および学生から本制度を来年度以降も実施し、より充実したものにして欲しいとの意見をいただいた。次年度は実施企業を県外にも広げること検討している。

御協力いただいた次の企業に厚く御礼申し上げます。（五十音順）

国土環境(株)、(財)食品安全評価センター、(株)鈴与総合研究所、東海物産(株)、東京フードテクノ(株)、日本食品化工(株)、(株)万城食品、(株)マルハチ村松、焼津水産化学(株)、

（大学院生活健康科学研究科長 木苗直秀）

12月7日 やあ先輩！21世紀の夢とロマンを語り合おう

15周年記念事業の一環として、次の予定で先輩と語る会を開催します。国内外で活躍する諸君の先輩（5学部・大学院出身者および留学生を含め11名）から学生時代の思い出、社会での体験談、そして今世紀の夢を話して頂き、引き続き先輩を囲んで楽しい語らいのひとときを過ごそうと思っています。学生、教職員の皆様の積極的な参加を期待しています。

日時：平成13年12月7日（金）午後4時30分～午後8時30分

構成：第1部 先輩が語る「21世紀の夢とロマン」 4時30分～6時50分 大講堂

第2部 先輩を囲んで飲み語る 7時～8時30分 学生ホール

（第1部に参加したのち、第2部に出席してください）

「明日の夢を語る会」

・教職員委員：奥直人（薬）木苗直秀（食）菱田雅晴（国）北大路信郷（経）松田正己（看）桑原厚和（環）長岡孝三（事）中川一政（事）長島樹利（学）

・学生委員：漆畑光介・坂口泰隆（1）徳増暁・小野寺綾（2）三浦貴子、松尾愛子（3）渡部梓、縄巻功美（4）張平平・王超群・白金梅（5）

1. クラブ・サークル連合、2. 剣祭実行委員会、3. 新入生歓迎委員会、4. AVL委員会、5. ふじのくに親善大使

受賞 第19回日本植物細胞分子生物学会で奨励賞を受賞

生活健康科学研究科の丹羽康夫助手が第19回日本植物細胞分子生物学会において「植物用GFPの改良とその利用法の開発に関する研究」で奨励賞を受賞した。

クラゲの Green fluorescent protein (GFP) は、タンパク質自身が緑色の蛍光を発するユニークな性質を持ち、このGFPを植物研究に利用できるよう改良した。この改良型GFPIは、植物へ遺伝子を導入する際の標識、植物内での遺伝子発現量の定量、あるいは未知タンパク質の細胞内の位置を同定する目印として国内外を問わず広く利用されている。

受賞 日本社会心理学会で研究優秀賞を受賞

看護学部の西田公昭講師が日本社会心理学会における研究優秀賞を受賞した。

日本社会心理学会が過去2年の間、機関紙「社会心理学研究」に発表された論文から選択される3つの賞（研究優秀賞、着想独創賞、研究技法賞）の一つである。

西田公昭 2001 「オウム真理教の犯罪行動についての社会心理学的研究」

社会心理学研究16巻3号, 170-183

顕彰

本学の伊勢村護（食品栄養科学部）教授が、「がん転移抑制機能などの研究」の功績が認められ、社団法人静岡県茶業会議所から平成13年度の顕彰者に選ばれた。

本学の太石邦枝（食品栄養科学部）助教授が長年にわたる栄養士養成の教育・研究の功績が認められ、平成13年度の栄養関係功労者厚生労働大臣表彰の顕彰者に選ばれた。

食品栄養科学部棟の増設

本学では、平成13年3月の短期大学部浜松校の閉校に伴う教員5名の移籍に対応するため、食品栄養科学部棟の増設を行った。これに伴い、近年の高齢化社会が抱える諸問題や、国民習慣病といわれる成人病、臨床栄養、老人栄養等の食品科学や栄養科学の分野にかかる諸問題に的確かつ迅速に対応するなど、教育・研究のより一層の充実が図られると期待される。

建物は、鉄筋コンクリート造の3階建てで、教員室、研究室などの総延べ床面積は約1500で、昨年9月から工事を開始し本年9月には竣工し、すでに教員等の引越しも終えている。



第8回国際環境変異原学会が開催される！

4年に1度開かれる本学会の第8回大会が10月21日(日)から26日(金)まで静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」で開催された。本大会では生活環境中の変異原、発がん物質に関して個体レベル、DNAレベルで作用機作を解明するとともに抗変異原、抗発がん物質の分離・同定、さらにそれら化学物質の単独および複合的な影響の解明とリスク評価について最新の情報交換を行った。

44ヶ国1地域より外国人405名を含む815名が一堂に会して、基調講演(3)、特別講演(5)、シンポジウム(25)、スペシャルセッション(3)、ワーク

ショップ(2)とともに一般口演(160)、ポスター(370)など730題の発表があった。また、外国人からの若手研究者60名が静岡市を中心としてホームステイを実施したので、地域の方々と交流する場ができた。それ故、新しい形の国際学会として内容的にも極めて充実したものになったと思う。本大会の開催に御尽力頂きました日本学術会議、国際環境変異原連盟、静岡県、静岡市、静岡県立大学をはじめ開催期間中、御協力頂きましたボランティアの皆様、静岡県立大学教職員、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

(第8回国際環境変異原学会実行委員長 木苗直秀)



第8回国際環境変異原学会パンケットの鏡割り



第8回国際環境変異原学会スペシャルセッションの参加者達

人事

採用

(10月1日付け)

吉成 浩一 薬学部助手
宮本 悟 短期大学部講師

昇任

(11月1日付け)

野村 千文 看護学部講師(助手から)

平成13年度 科学研究費内定状況

科学研究費補助金の追加交付内定

特定領域研究(C)(2)

デングウイルスに対する宿主受容体の同定と感染制御

薬学部教授 鈴木康夫

基盤研究(C)(2)

触媒的不斉炭素 炭素結合形成反応に適合する新規配位子系の開発と応用

薬学部助教授 森本俊明

研究助成の採択

第33回(2001年) 財団法人 内藤記念科学振興財団

阿部 郁朗 薬学部講師

「植物ポリフェノールをリードとする新規コレステロール生合成阻害剤の分子設計」

池本 守 薬学部講師

「HDLコレステロール輸送・代謝機構の解明」

平成13年 社団法人 静岡県茶業会議所

中村 好志 薬学部助教授

「茶葉の水溶性高分子画分の発がん抑制作用活性本体の解明」

阿部 郁朗 薬学部講師

「緑茶ポリフェノールをリードとする医薬品開発の基礎研究」

日本環境変異原学会第30回記念大会を終えて

去る10月21日(日) 静岡県コンベンション・アーツセンター「グランシップ」の会議ホール(風)にて、基調講演(2題)、特別講演(3題)、および年次総会、本年度学術賞(1名)、奨励賞(2名)の授賞式および各受賞講演を開催致しました。

学会シーズンでお忙しい中、250名余りにご参集頂き、学会の今後の在り方や期待される研究などについて活発に意見交換されました。21世紀最初の、また本学会発足30年記念の大会を盛況のうちに終えることができました。

本大会開催にあたり、本学より集会助成金を頂き、感謝申し上げますとともに、本大会にお力添えを頂いた多くの教職員、学生さんに深く感謝致し

ます。

日本環境変異原学会第30回記念大会大会長
出川雅邦(薬学部衛生化学教室)



ニューキャッスル大学夏期語学研修に参加して

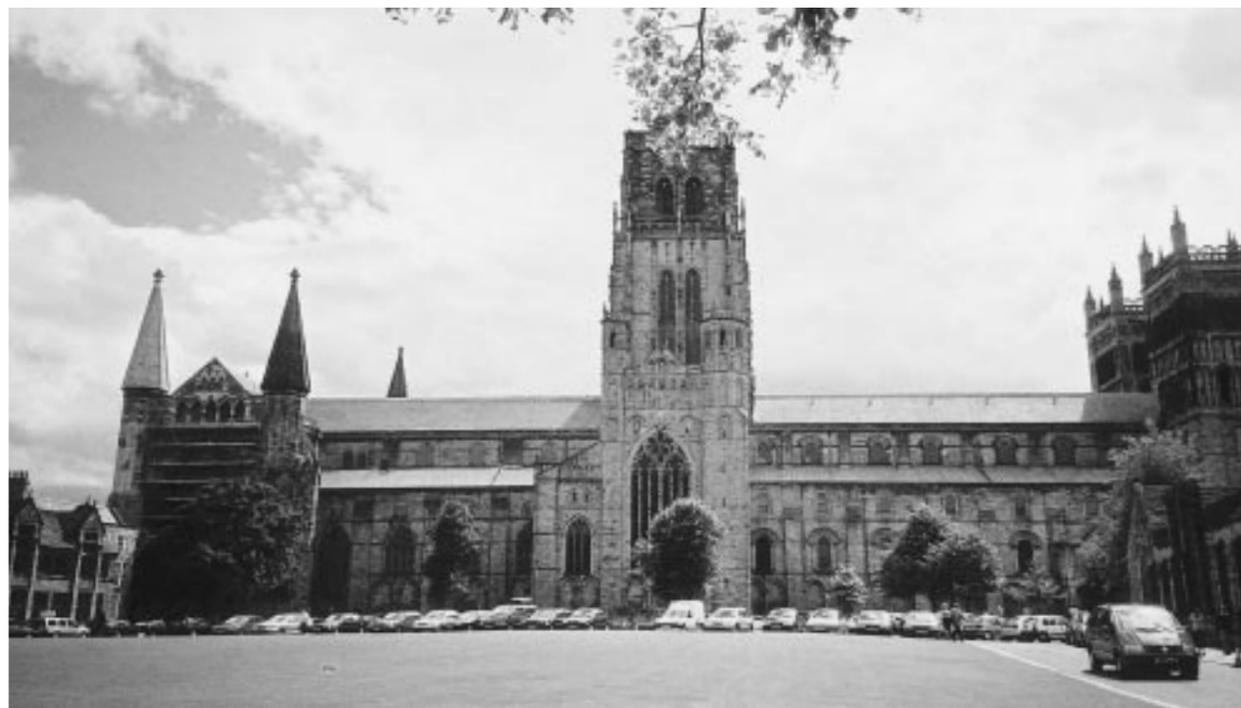
国際関係学部 国際言語文化学科 3年 津田 和歌子

ニューキャッスルでの夏期語学研修で、私は実にさまざまなものを得た。初めての土地でしかも慣れない英語での生活は予想以上にハプニングの連続だったが、そのどれもが今の私にとって良い経験となっている。

特に思い出に残っているのは、4週間暮らしたホームステイ先の家庭だ。ホストマザーが一人で家を切り盛りしていて私の他に3人他国からの留学生がいたのだが、最初はコミュニケーションをとるのとにかく苦労した。当然のことながらそれぞれの出身地のなまりが色濃く出ているのに加え、自分のリスニング力不足でなかなか会話が成立しなかったのだ。しかし毎日御飯と一緒に食べたり食後に居間でテレビを見ながらいろいろなことを話したりする中で次第に相手の言うことが理解できるようになり、自分の言いたいことも少しずつながら伝えられるようになっていった。ホストマザーが最後まで容赦なく普通の人と同じ速さでしゃべってくれたのも良かったのかもしれない。

毎日彼女が言うことを必死で聞き取ろうとするし、分からなければ何度も聞き返すのでそれがとても英語の勉強に役立った。また滞在中慣れない食生活と疲れで体調を崩したこともあったが、ホストマザーや友達が気遣ってくれ、早く回復することができた。家に初めて着いた日にホストマザーが「ここでは私がママよ。」と豪快に笑っていた姿は今でも忘れられない。

授業は最初に受けるテストでクラス分けされるので、レベルが高すぎて困ることもなく、友達もたくさんできて楽しく勉強できた。「話す・聞く・読む・書く」の4技能を向上させるためのさまざまな課題を主にペアワークやグループワークでするので受身にならずに学習できる。分からない単語や表現も先生に聞けば分かりやすく説明してもらえたり、友達同士でも絵やジェスチャーなど何でも使って教え合った。中国や台湾の友達とはどうしても伝わらない時に漢字を書いたら即伝わったということもあった。また勉強以外にも他国の



人々といろいろな話ができるということが語学研修の良さだろう。日本と全く違う部分に驚いたり、共通の話題に盛り上がったり、間違いだらけの英語でも一生懸命聞いて伝えようとすることは



とにかく新鮮だった。

授業の他には、名所をめぐる週末旅行や毎週末のパーティなど各種イベントも充実していた。旅行は現地に着けば自由行動がほとんどなので地元の人々と自分達でコミュニケーションをとらなければならない。心が洗われるような壮大な景色の中で、またある時は思わず買い物心がくすぐられるようなおしゃれな街でそれを体験できたことは本当に良い思い出だ。

そしてニューキャッスルの魅力はなんといってもその環境の良さにある。至る所に大きな公園があり、食後の散歩にも気軽に行ける。また大学が

らすぐの所にショッピングセンターや映画館が立ち並び、授業が早く終われば友達同士で遊ぶこともできる。そこから少し歩けばタイン河と三つの大きな橋があり、夜はライトアップされて絶好の夜景スポットになっていたり、地下鉄に15分も乗ればきれいなビーチに出られたりと、自然と街が同居して生活するには最適な場所だ。それだけではなく、街の人々も本当に親切で誰に道を尋ねても丁寧に答えてくれ、特に不安の大きかった当初はその優しさが嬉しかった。

日本に帰ってきて時々ニューキャッスルでの日々を思い出すことがある。滞在期間は短かったが、そこで体験したことは日本での生活の何年分にもあたるにつづく感じる。日本にいれば言葉の問題も生活習慣の違いもなく安心して暮らせるが、何でも自分で解決しなければいけない状況に身を置くことで得られたものは何ものにも変え難い。おそらく言語力がない、家族もいない、土地勘もないというないないづくしの生活だからこそ得られたのだろう。海外留学に意欲的な人だけでなく、毎日の生活に何か疑問を感じている人や自分の英語力に不安を感じている人にもぜひ思い切って海外での生活に飛び込んでほしい。そこで得たものは必ずその後の生活に大きな影響をもたらしてくれるだろう。



図書館だより

本学教員からの著書寄贈

次のとおり著書を寄贈していただきました。自由閲覧室の教員著作コーナーは、大半の著作を収集してから開設する予定です。先生方のご協力をお願いします。

《本学教員著書》(平成13年8～10月)

小浜裕久教授(国際関係学部)

・戦後日本の産業発展 日本評論社 2001年

板井隆彦助教授(食品栄養科学部)

・農村ビデオトープ:自然復元特集7 分担執筆 信山社 2000年

・しずおか自然図鑑 分担執筆 静岡新聞社 2001年

佐藤登美教授(看護学部)

・看護過程 メジカルフレンド社 平成7年

・ケアの本質を探る:佐藤登美対談 メジカルフレンド社 1997年

・こどもの看護 改訂版 編著 ヘルス出版 2001年

・人間回復のためのケアマネジメント 編著 メジカルフレンド社 2000年

・リハビリテーションにおける連携の新たな展開 編集 メジカルフレンド社 2001年

シリーズ・電子ジャーナル(1)

インターネットの爆発的な普及に伴い、学術雑誌をデジタル形式で提供するいわゆる「電子ジャーナル」が急速に増加しています。電子ジャーナルは、文献をオンライン上でいち早く読むことができる速報性、求める論文を容易に探し出せる検索性、簡単に引用文献が参照できるリンク機能など多くの優れた特徴をもち、今後ますますその重要性を増していくものと思われます。一体どれくらいの電子ジャーナルが存在するのか正確な数は把握できませんが、世界最大と言われる全文データベースサービス“ProQuest”では8000誌以上のタイトルが収録され、北海道大学図書館職員有志で作成しているオンラインジャーナル集

(http://ambitious.lib.hokudai.jp/online_journal/)には約8400タイトルが採録されています。

電子ジャーナルと一口に言っても、提供される形態やデータ形式、購読方法などは様々です。現在本学で利用できるのは、料金のかからないものに限られていますが、購読料は印刷体の年間購読契約をベースにしたものが多く、印刷体購読料に追加料金を支払って電子版を購読するもの、電子版のみについて独自の購読方式をとるものなどがあります。電子ジャーナルを提供するサイトには、出版社自身が運営するものと、他の出版社が作成した電子ジャーナルを集めて提供するアグリゲータサイトがあります。アグリゲータは、異なるタイトルや出版社のジャーナルを統一したインターフェースで提供するサービスです。

今回は、代表的な電子ジャーナルサービスについてご紹介します。

クラブ・サークル紹介

茶道部

茶道という言葉で何を思い浮かべますか? 正座をしなければならない、作法が多いなどと堅い印象を持っている人が多いのではないかと思います。でも私達県大茶道部を見てください。部員は全員仲が良く、先生の指導のもと楽しく茶道を学んでいます。基礎ができてしまえばどんどん上達することができます。

今年は男子部員がやっと2人になりました。女子ばかりの部員の中で多少肩身の狭い思いをしているのではないかと思います。頑張って茶道を学んでいます。一緒に頑張ってくれる男子部員を募集中です!



茶道部では年に4回お茶会を行っています。このお茶会が日頃の練習の成果の見せ所です。その季節に合ったお道具を使い、お菓子もあわせて自分たちで作ることもあります。七夕のお茶会では浴衣を着て短冊を書いて飾りました。夜は空から見える窓際へ、願いが叶った人もいます。先日は剣祭に合わせて秋のお茶会を行いました。男子は袴、女子は着物を着ました。慣れない格好に苦労しつつも男子は男らしく、女子は華やかになり、お茶会が楽しいものになりました。皆さんもぜひ来年のお茶会に来て日本の文化の一つを味わってみてください。

ラグビー部

こんにちは、ラグビー部です。

みなさん、ラグビーというスポーツに対してどんなイメージを持っていますか? 泥だらけになりながら戦う、ちょっと汚いスポーツですか? それとも、傷だらけになって戦う格闘技のようなスポーツですか? - どちらも私達部員の愛するラグビーの特徴と言えるでしょう。

ラグビー部は美しい富士山の見守る中、県大グラウンドで日々練習を行っています。集中した2時間の練習は、私達にとってラグビーを知り、互いに心を通わせ、そして個人として心と体を鍛える場です。これらの繰り返しによって県大ラグビー部のチームワークが生まれます。

こうしてみると、ラグビーはとても難しく、近寄りたいたいスポーツのように思えますが、実際はそうではありません。その堅いイメージを一度取り払えば、誰にでもできるスポーツです。というのも、わが県大ラグビー部も多くが全くの初心者からのスタートでした。でも徐々にラグビーの魅力に気づき、あるいはラグビー部の温かい雰囲気好きになって今に至ります。私達の部は私生活でも互いを必要とするような強い信頼関係を確立できるとも仲の良い部です。15人が一体となって楕円のボールを守り抜くラグビーにも、互いを信頼することは必須の条件です。この仲間だからこそ、4年間を共に過ごし、同じ目標に向かって頑張れる、強い絆で結ばれているのだと思います。

